

東欧植民の子孫たちの旅--シロンスク地方の18世紀と今日

著者	垣本 せつ子
著者別名	Setsuko KAKIMOTO
雑誌名	観光学研究
号	3
ページ	21-31
発行年	2004-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005118/

東欧植民の子孫たちの旅 —— シロンスク地方の18世紀と今日 ——

垣 本 せつ子*

2004年5月に東欧10カ国が欧州連合に加盟する。第二次世界大戦後、体制の違いにより、別の文化圏になったようだった東と西のヨーロッパが再び一つのヨーロッパになろうとしている。現在は、新しい憲法を制定するための協議が続いている。

統合を前にして、当然ともいえるが、改めて各国間の懸案事項が再燃した。ドイツでは第二次世界大戦後、ポーランドの新しい国土に加えられた旧ドイツ領から強制移住させられたドイツ人の声が大きくなっている。「追放された人々」(Vertriebene)¹は自分の悲惨な体験を語り、かつて捨てていかなければならなかった土地の返還あるいは補償を求めている。それに対抗してポーランドはドイツに対して戦争中のポーランド人被害者への個人補償を求めている。

しかし隣国同士が同じ体制を支えていくという結論はすでに出された。反ナチスを梃子に、第二次世界大戦後に築かれたポーランド政府が体制化した反独感情は、公式には消えている。冷戦終了後の市民の和解の試みは実を結んできた。たとえば、1993年には、第二次世界大戦が勃発した地、グダンスク(ダンチヒ)市近郊でドイツ・ポーランド両国の古参兵が初めて会合を持った。² その後もこの種の共同の記念行事は続いている。このグダンスクが位置するバルト海沿岸地域(ポンメルンやかつてのプロイセン)や、ポーランド、ドイツ、チェコの3国に挟まれたシロンスク地方は中世に植民したドイツ人が大きな足跡を残した地域であり、今日、それらの地方の広報や観光業者は積極的にドイツ人の歴史を取り上げている。ドイツ人の足跡をナチスの蛮行に帰する歴史観は終わったのである。

一口にドイツ人の東欧植民といっても、向かった先々の条件で異なった経過をたどったのはいうまでもない。ここでは、今日でもドイツ人が多く住むシロンスク地方(ドイツ領であったときにはシュレージエン地方)³について、一方でバルト海沿岸地域と比較しつつ、そして他方でシロンスク地方の18世紀と今日を比較しながら、その独自性を明らかにしていきたい。

1. 中世におけるドイツ東欧植民

もともと古代ローマ帝国はゲルマン民族の大移動が引き金になって滅びたと言われている。歴史の記述によれば紀元前475年～450年から登場するケルト人に代わって、バルト海沿岸、ユトランド

*東洋大学国際地域学部; Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

半島、スカンジナビア半島から南下してきたゲルマン人が紀元初め頃、中部ヨーロッパを支配するようになったとされる。そしてその後を追ってスラブ人も中部ヨーロッパへ移動してきたといわれる。

そこで、中世におけるドイツ人の植民活動はかつていた方角へ戻っていく動きだとして「ドラック・ナハ・オステン」とも呼ばれる。直訳すれば「東へ向かったの衝動」である。しかし、中世における植民は、地域ごとに植民を受け入れる為政者、植民者を連れて行くロカトル（植民請負人）、植民者の三者が交わす契約に則って実行された「企業活動」であった。前後5世紀間にわたるこの活動は12世紀、13世紀にピークを迎え、14世紀のペストの流行と15世紀のフス戦争で停止に追い込まれる。

中世の植民活動は一つの宗教的な目的を、そして二つの実際的な目的を抱えていた。宗教的な目的とはすなわちキリスト教の布教である。植民者が新開地へ向かうことは神に仕えることだった。キリスト教は古代ローマ帝国で4世紀初めに公認されるが、中部ヨーロッパを支配するようになったフランク王国のキリスト教受け入れは5世紀末である。10世紀末にチェコ・ポーランド・ハンガリーの王が洗礼を受ける。それは取りも直さず、この地域が、ローマ教皇によって権威の与えられた神聖ローマ帝国を中心とした世界に組み入れられたことを意味する。またこれを契機にヨーロッパが東に拡大したことを意味する。キリスト教の布教は植民活動の条件でも目的でもあった。

実際的な目的の一つは通商活動の拠点作りである。ハンザ同盟はバルト海沿岸の地域に作られた都市と、要路で通じる内陸の都市が一緒に作り上げた中世における通商のネットワークだった。そしてそれは単に、散在した拠点作りにとどまらなかった。異教徒である古プロイセン人と戦ってほしいというポーランドのマゾフシェ侯の要請を受けてドイツ騎士修道会がバルト海沿岸地域に入っていったのは13世紀の初めで、この修道会は布教・通商の双方に従事しながら領土を拡大しつづけ、1525年まで独立を維持する。この修道会国家に今日の国民国家としての性格はないにせよ、この地は19世紀に生まれたドイツ帝国の礎石である。というのも、修道会国家を征服したポーランド王はこの地を封土としてプロイセン王国に与え、そのプロイセンが19世紀にドイツ諸領邦の盟主となったからである。ちなみに騎士修道会自体は解体せず、本拠地をウィーンにおいて今日も活動している。

バルト海沿岸地方へは通商ルートの拠点として、商人、そして領主となる騎士がやってきた。信仰を広めるという名目はあったが、原住民は収奪され征服されたのである。⁴ ドイツ騎士修道会が掌握したりボニア地方には事実、ドイツ人農民は入植しなかったという。

植民活動のもう一つの実際的なそして本来の目的は開墾事業である。12、13世紀の間に東欧に入植した農民は約40万人とされる。これは当時のドイツ諸邦の人口のおよそ7%である。それだけ東欧への移住に魅力があったのは、開墾した土地については免税措置や占有権・相続権など有利な条件を手に入れられたからである。シロンスク地方もそのようなドイツ人農民の開墾地の一つであった。

シロンスク地方とはどこにあるのだろうか。今日のポーランドの行政区としてではなく、歴史的

にシュレージエン地方と呼ばれた地域は、ドイツ・ポーランド・チェコの3国に挟まれた北緯51度近辺の地域で、北西から南東に伸び、長さ250km、幅は100ないし150kmの広さである。中心都市を挙げれば東経15°にゲルリッツ（現ドイツ）、17°にプロツワフ（現ポーランド）、19°にカトビツェ（現ポーランド）がある。キエフを東端としたヨーロッパの東西要路、そして北海およびバルト海から地中海へ伸びる南北の琥珀街道の中心に位置し、オーダー川をはじめ数多くの水路に恵まれている。交通の要路を含んでいたため頻繁に戦場になった。例えば、1241年には、レグニツァ市近郊にモンゴル人が襲来したとされる。

この地方の為政者はプロツワフ侯国（ポーランド）、ボヘミア（チェコ、当時においては神聖ローマ帝国）、ハンガリー、ボヘミア、そしてオーストリアのハプスブルク家がボヘミア王、ハンガリー王を兼ねることになったことから、オーストリアへと移り代わった。さらに18世紀半ばに支配者はプロイセンに代わり、⁵ ドイツ帝国に引き継がれる。第一次世界大戦後の住民投票を経て、ポーランドとドイツ両国間で分割、ナチスによる占領、そして今日ではほとんどすべての地域がポーランド領となった。シロンスク地方はヨーロッパの中心に位置するにもかかわらず、すべての政治的中心から遠い。ワルシャワ、プラハ、ブタペスト、ウィーン、ベルリンのいずれも至近距離にない。ここへ、ドイツ人農民はプロツワフ侯国の時代から入植して、スラブ人農民より有利な扱いを受けた。開墾で指導的な役割を果たしたシトー修道会と共に、西方から農業の先端技術をもたらす先駆者として優遇されたのである。⁶ おそらく先住民との小競り合いはあったであろうが、戦争を伴わなかった入植はその後の長い共生関係を生み出した。今日、シュレージエン人（シロンスク人）という概念はドイツでもポーランドでも共通に理解されている。それはいずれの国にも属さない、独特の人種であり、独特のメンタリティーを備えた人々と言う意味である。シュレージエン方言（シロンスク方言）はドイツ語にもポーランド語にもある。

2. 18世紀の旅行ブームとシュレージエン地方(シロンスク地方)についての記述

中世の植民活動がペストや宗教戦争で停滞した後、17世紀後半から18世紀にかけては絶対主義君主が、獲得した領土を耕し産業を育成するために植民政策をおこなった。プロイセンのフリードリヒ二世はシュレージエン地方の地下資源を採掘するために、そして、農業を振興するために多数の植民者を送った。国民国家形成の過程での国策としての植民である。軍事力を背景にした植民であったが、反面、宗派の違いに対しては寛容な政策が採られた。シュレージエン地方のカトリック教徒は高位の公職につくことはできなかったが、修道会の組織・財産は守られた。

フリードリヒ二世（フリードリヒ大王）は啓蒙専制君主とも呼ばれる。宗教上の寛容は合理性を尊び、実利・実学を優先する思想の現れである。「君主は国家の第一の僕」という有名な言葉は、⁷ それまで支配のよりどころであった神が国家に代わったことを意味するが、彼の目標は国家に神秘的な属性をもたせるのではなく、あくまでも合理的な行政機構を作ることにあった。

彼の支配下で市民の行動の自由が広がった。その一つの現れが旅行の自由である。貴族の子弟が

見聞を広げるためにパリやローマを訪れるグランドツアーは17世紀をピークとした。18世紀になると多少余裕がある市民は誰も、子供を勉学の旅に送り出した。⁸ 反面、安易な旅の風潮に対して批判も加えられる。そしてそれに対して改めて旅行の意義が、啓蒙主義の時代にふさわしく、実利を追い、真理を探究するために強調されるのである。

その一つの現われが大学における「旅行学講座」の開設である。⁹ 1737年に神聖ローマ帝国内では45番目の大学としてゲッティンゲン大学が開校した。同大学の教授陣の採用要件の一つに「旅行をしてきた人」があった。1749年には「旅行学講座」が開かれ、数人の教授陣に引き継がれ19世紀まで継続した。¹⁰ 今日のように、様々な機器を駆使して遠隔地から瞬時に情報を得られる時代ではない。講座では旅をして得られる有意義な情報が総括的に、分野別に、論じられた。「距離や高度を測り地形を把握する（自然科学）」、「社会制度、特に啓蒙がどの程度進んでいるかを把握する（社会科学）」、「その国の人々、特に為政者の人格を観察する（人文科学）」ことは当時の啓蒙主義者の旅のテーマだった。¹¹ 旅の仕方や心得も講義内容に含まれる。当時、講義を担当した一人であるシュレーツァーは1777年に「旅行学」と「新聞学」を同時に開講した。¹² 真実探求には直接の経験が必要であり、しかも直接の体験から報じられる情報も批判的に精査されるべきだとの思想がこの二つの講座を結んでいる。

一般庶民の旅行の追い風になったのは大学の「旅行学講座」だけではない。「センチメンタル・ジャーニー」（1768年）で有名な牧師ローレンス・スターンは「説教集」の中で「放蕩息子（ルカ伝 XV13）」を取り上げ、斬新な解釈をする。¹³ 周知のように「放蕩息子」は父親から早く財産をもらい、異国に出かけて遊蕩三昧で身を持ち崩す。その異邦で豚飼いになり、豚の餌さえ自由に口にできなくなった身の上を嘆いてから、父親のもとに戻り、許しを請う。父親は「失われたものが見つかった」ことを喜び、宴を催す、というお話である。スターンは父親の喜びをごく自然なこととしてとらえ、「持ち物すべてを持って、遠くの国へ旅立った」息子の旅への衝動に焦点を当てる。スターンは旅への憧れは誰にも備わっているという。すなわち、新しいものを見たいという衝動は、研究し、知識を求めてやまない心の自然な衝動である。旅をして得られることはたくさんある。「言語や法律・慣習を学び、当地の政府や国民の関心を理解する。振る舞いや会話が洗練され、新しい事物に触れることで、それまで馴染み深かったものに新しい光が当たる。自分の判断を見直し、自分自身を洞察し、自らを作り上げる」、これが旅の効用であるという。しかし、「放蕩息子」には適切な旅のガイドが欠けていた、と彼は続ける。また、たとえガイドがいたとしても、異国でしかるべき人々と付き合うのはむずかしい。人と付き合うには会話をしなければならないが、そのためには会話の相手と互角の知識が必要である。結局、現地の人と若者の会話は続かない、そして双方とも失望、旅の若者の相手をするのは、気軽に付き合える悪い仲間、というのがお決まりのコースであるという。スターンによれば、「放蕩息子」は旅の条件が整わなければ必然的に生まれるものなのだ。旅は本来、擁護されるべきである、という。

この説教は、旅を道徳的に擁護する文章として18世紀の旅のガイドブックに引用された。¹⁴ 1540年から1831年までにヨーロッパで出版された旅行手引書297点を発行年代別に分類したクッターは、

発行数に増減があることだけではなく、内容の変化も指摘する。¹⁵ かつてのグランド・ツアーの行き先だけではなく、自国内、東欧、北欧もしだいに旅先の対象となった。旅の行程そのものに注目が集まり、その記録が文学として確立する。¹⁶

18世紀のドイツ人の家庭で最も多く読まれた作品の一つが、書簡体小説「ゾフィーの旅、メーメルからザクセンまで」である。¹⁷ 著者のヘルメスは1738年、ポンメルン地方に生まれ、ケーニヒスベルク大学で神学を学ぶ。そこでカントの哲学の講義も受講した。ダンチヒやベルリンに滞在した後、1769年からはシュレージエン地方に職を得て移り住み、1821年に亡くなるまで、神学教授・作家として名声に包まれた生涯を送る。ヘルメスは終始、ドイツ人が中世に入植した東の地域に住み、その小説もこの地域のドイツ人たちを描いている。メーメル（今日のリトアニア、クライペダ市）は第一次世界大戦終了まではドイツ領の東端にあった。貧しい貴族の女性ゾフィーはメーメルから一人でザクセン地方へ旅し、様々な登場人物と共に東の各地域の特性を論じる。旅の顛末という小説の枠組みは弱く、旅の途中で出会った人々の話の中に当時の世相や思潮が記される。

旅を始めるにあたってゾフィーは、旅行の意味を問うている。下に挙げる息子の話は小ぶりの「放蕩息子」である。

一緒に（馬車に）乗り合わせた人が話してくれたのですが、ある町のお偉方の息子さんが、イギリスやフランスへ行って、帰ってきたんだそうです。お父さんは早速、お祝いということで大変なご馳走を用意しました。もう以前に旅行をしてきた若者が皆集まってきて、随分あることないこと、おしゃべりが弾みました。「息子よ」と老人が言いました。「お前は何も言わないね。何か（旅先で）気がつかなかったかい」。「そうだね」と息子はカキをするする口に入れて答えます。「バイエルンでは豚が皆、赤かったことかな」。私がこの旅行から帰ってきたら、あなたに何をお話できるでしょうか！¹⁸

ゾフィーや彼女が出会う人々に共通しているのは「外地にいるドイツ人」という意識である。ドイツという国がない時代においてゾフィーが口にする「祖国」は「ザクセン王国」だったり「バイエルン選帝侯国」ということになるが、内なるドイツ、外のドイツという区別は小説を貫いて流れる。小説の冒頭、第一番目の手紙では「祖国」という言葉をめぐってお茶の時間に、ゾフィーとL氏が話し合ったことが書かれる。L氏はこんな風に訴える。

（メーメルで）新参者の私は踏みつけられました。もうパンケーキみたいに。ここでうまく行っていた時だって故郷恋しきで胸がつぶれそうだったのです。最後に祖国から戻ってきたとき、もうこれで故郷を見るのも最後だとわかっておりまして、そのとき私がこらえなければならなかった気持ちはとてもお伝えできるものではありません。（……）馬車で郷里の小さな町の町長さんと隣り合いました。気分が紛れるように、丘の連なっているあたりを指して尋ねてみました。「ああ、あれは私らの方の国境くにざかいです」と言われました。「私らの方の国境」、これを一生の間、言える男をとてもうらやましく思ったものです。¹⁹

旅はバルト海沿岸を進み、ダンチヒに到着する。中世にはドイツ騎士修道会の支配下、ハンザ商人の町として繁栄したダンチヒでゾフィーは次のようなお国自慢を聞いた。それは同時に、移民の

境涯を嘆く L 氏の上の供述に連なる。

ダンチヒほど人々の融合が皆を幸せにしている町はありません。この町以外のどこでも、古くからいる住民が新参者より幅をきかせていることが、旅行を続けるうちにおわかりになるでしょう。そして新参者は慣れると古くからの人たちと同じ考え方になるのです。人間はちょうどコルンさんの農場にいる鴨のようなものです。今日オリーヴァから来た一羽の鴨が群れに加えられました。たちまち皆が寄ってたかって新参者をやって、この鴨は隅で大人しく、回りの鴨が首をかしげたり瞬きしたりするのを眺めることになります。それでも機会を逃さずに穀粒を口にするうちに仲間に溶け込んでいきます。今度はシドリッツからまた新しい鴨が来ました。また同じことが繰り返されますが、オリーヴァの鴨がこの新参者を一番攻撃しようとするかもしれませんよ。²⁰

他方、褒め称えられるダンチヒに対して、シュレージエン地方の人間は「非社交的、けち、猜疑心が強い、よそ者に冷たい、無知、粗野」と厳しい評価を受ける。²¹ ちょうど、ダンチヒの人間と正反対である。しかしそのような意見に対しては、別の者からたちまちいくつもの逸話でもって反論が試みられる。

18世紀のシュレージエン地方はマリア・テレジアの皇位継承問題に端を発して、前後23年にもわたってオーストリア・プロイセン間の戦争が展開した地である。1740年に第一次シュレージエン戦争が勃発、1742年に終結するも、1745年に第二次シュレージエン戦争が起き、1756年から63年までの三回目の戦争はヨーロッパ諸列強や北米植民地を巻き込んで7年戦争と呼ばれる。作者ヘルメスがシュレージエン地方に住むようになったのはこの戦争後であるが、小説中のゾフィーの旅の出発は1761年であり、シュレージエンは戦争の話題なしに論じることができなかった。

小説の登場人物の一人、ファネロ夫人は、ダンチヒと並んで社会福祉が進んだ町としてプレスラウ（現ブロッツワフ）を挙げる。プレスラウはシュレージエン地方の中心都市である。同市は奨学金の制度を作って、身分の上下を問わず、その地で、また別の地方の大学で勉学する機会を新住民の子弟にも与えているという。それというのも、

シュレージエンの人は人助けを厭わず、外部に誇らずに慈善を行うのです。この善良な邦^{くに}の人々は、一私は歴史的にこの人たちは特別な植民者だと思っているのですが、もしもいどきに外部の者と混ざることによって極度の緊張を余儀なくされなかったなら、もしも彼らの愛されるべき高潔な誠実さが踏みにじられることがなかったなら、もしもドイツ人の性格の美しい本質とポーランド人の友好的な礼儀正しさが混じり合ってできた彼らの誠実さを曲げたあのおぞましいことわざが作られなかったら、シュレージエンは今日、ドイツが退廃したことを遺憾に思うすべての人々にとって避難先となったことでしょう。²²

シュレージエンという辺境の地においてこそ、「ドイツ人の性格の美しい本質」が論じられる。そしてその意味は次の二つの逸話でもう少し具体的に説明される。

どちらも戦禍のシュレージエンの農民の話である。

数人の落伍兵たちがある納屋を襲った。納屋の持ち主は、焼けて灰になった家からわずかな家財道具をそこ

に移しておいたのだった。主人は3、4人の屈強な農民と一緒に、隣の畑で種まきをしていたが、何が起こったか見るために戻ってきた。略奪者たちに怒りをぶつける代わりに、彼はしばらく眺めてから、家の焼け跡に行って種まき袋をいっぱいにした。そして先ほどまでと同じように、今度は穀物ではなく焼け落ちた自分の家の灰を畑の肥料として蒔いていった。²³

また別の農民には垣根のない果樹園の中で若株だけが残った。病気のため仮小屋で休んでいた将校は、数日来、老人が果樹園の回りに深い堀を掘っているのを見ていた。それが終わると老人は賛美歌をいくつか歌い終えるまでの間、せっせと切り株に芽を接ぎ、挿し木をしていった。将校は心を動かされて、杖をついて老人のところへ行った。「父さん、この木の実を食べられndらう！」―「わしは無理じゃ」と老人は答えて、はげ頭を覆っていた帽子をとった。「わしには誰もおらん。息子たちはリッサに、妻はこの灰の下に眠っておるよ。じゃがこの木に実がついたら、オーストリア人でもロシア人でもよし、お前たち誰か、のどが渇いた奴がここで休めばよいだろう」。²⁴

ファネロ夫人が説く「ドイツ」的な本質は、神に仕えて荒蕪地を開墾した中世の農民に遡る。通商で栄えたバルト海沿岸地方の地域とは別の役割をシュレージエン地方は与えられ、農民の強力な保守主義が近代の国民国家の「民族」のイデオロギーを支えた。しかし、逆にドイツでもポーランドでもない、シュレージエン独特の世界への道も常に開かれていたのである。

3. 今日のシロンスク地方

ナチスが東欧を侵略する際に、中世の東欧植民をプロパガンダとして利用したのは言うまでもない。それだけに戦後の東欧諸国は、ドイツ人の歴史や文化を抹消しようとした。

「追放者協会」の資料によれば、終戦当時、東欧に住み強制移住の措置を受けたドイツ系住民は2000万人にのぼり、実際に戦後の2年間に追放された人々は1100万人を上回るとされる。このうちシロンスク地方出身で追放されたのは約300万人だった。一方、ポーランド語・ドイツ語のバイリンガルで、専門技能を持っていたためにこの地方からの追放を免れたドイツ系住民は約100万人であったという。²⁵ 1950年代末には赤十字の斡旋で、離れ離れになった家族を一緒にする帰還事業として、シロンスク地方から17万人（かつての低シュレージエンから5万5000人、高シュレージエンから11万5000人）のドイツ系住民が西ドイツ或いは東ドイツへ移住した。²⁶

ドイツとポーランドが外交関係を再開するのは、戦後25年を経た1970年である。旧住民によって、シロンスク地方に多くのドイツ系住民が残っていることは遍く知られていたが、ポーランド政府はその存在をほとんど認めようとしなかった。シロンスクでは「ドイツ語を話すのは石だけ」と言われたほどに言語・文化における非ドイツ化政策が著しく、同地方で出国を希望するドイツ系住民は多かったが、個人での出国申請は困難を伴った。²⁷

ドイツ系住民が自身の文化的なアイデンティティを主張するようになるのは1985年にゴルバチョフが登場し改革路線が定着してからである。ワレサが主導した「連帯」はすでに1980年に設立されていた。かつての高シュレージエンの中心、オポレ市では1985年に初めて、ドイツ系住民が「ポーランド・ドイツ人協会」の設立登録を申請するが、却下される。ドイツが統一し、ドイツとポーラ

ンドの国境線をオーダー・ナイセ川とする「国境に関する条約」が結ばれる1990年に、同協会の設立はようやく認められた。またこれに先立つ1989年6月、同じくオポレ市でノツソル司教によって戦後初めて、ドイツ系住民のためにドイツ語で礼拝が執り行われる。同年8月、同じく戦後初めて、共産党出身ではないマゾベツキがポーランドの大統領に就任、ドイツ系住民を少数民族として認める方針を出す。それまでポーランド国内に残留したドイツ人は公式には2500人とされてきた。²⁸

同年11月9日から14日まで西ドイツのコール首相がポーランドを訪れる。その訪問はドイツ系住民にとって大きな意味を持っていた。コールはポーランド大統領と共にシロンスク地方のクライザウへ行き、ドイツ語・ポーランド語双方でのミサに参加する。²⁹ 11月13日にはワルシャワのホテルでシロンスクのドイツ系住民グループと会合、翌日の両国の共同宣言にはポーランド国内のドイツ系住民への配慮が盛り込まれた。ちょうどこの期間の冒頭、11月9日にベルリンの壁が開かれ、コールは一日だけポーランドを離れるが、また戻ってきた。

1950年から90年までにドイツ国籍を持つ者として、東欧からドイツへ戻ったドイツ系住民の総数は240万人、そのうち、1988年が20万2000人、1989年に37万7000人、1990年に40万人と、この時期に帰国ラッシュが続く。³⁰ 戦後40年にしてドイツに突然、大量に出現した「ドイツ人」たちは終戦直後の状況を髣髴させ、驚きや訝しさの中で迎えられた。その人たちの中にはドイツ語を十分に話せない人もいた。³¹ 現在、東欧諸国には320万人、そのうちシロンスク地方に70万人前後のドイツ系住民が住んでいるという。彼らが「ドイツ」にこだわる心性は、現代のドイツのドイツ人に必ずしも理解されてはいない。

1999年の行政改革により、シロンスクは、石炭・鉄鋼の町カトビツェを中心とする「シロンスク州」、かつての高シュレージェンに該当する「オポレ州」、プロツワフ周辺の「低シロンスク州」に分かれた。冷戦終結後、10年以上を経て、ドイツ語・ドイツ文化はこの地方の特色として受け止められている。オポレ州のガイドブックには、同州の人口が108万人、そのうちドイツ人少数民族が約25万人と記載されている。また同州の中で「旧来の住民」は全体の約30%であるという。³² 戦後のポーランドはドイツ系住民の移動だけではなく、ユダヤ人の激減、ソ連領となった東部住民の西部地域への移住によって、該当地域の人口構成が大きく変わった。

バルト海沿岸はかつてプロイセン貴族が保養地としていただけに、観光への投資は冷戦終結当初より続いている。ドイツ騎士団が築いた名城マルボルク城やトルン市は世界遺産に登録され、トルン市は天文学者コペルニクスの町としても名高い。ロシアの飛び地であるカーニングラード(ケーニヒスベルク)は長らく防衛上の理由から旅行者の立ち入りを厳しく制限された地域だったが、プロイセン時代、保養地だったラウシェンの海水浴場で現在、ロシアの新興企業が五つ星ホテルを建設している。³³

このように脚光を浴びてきた旧プロイセン地域に比べ、シロンスク地方はゆっくり歩んでいる。この地と関係が深い世界遺産はアウシュビッツ収容所(オシフィエンチム)である。1940年に建設された同収容所は、当時シロンスクと同じ行政区に含まれていた³⁴。この収容所が人類の記憶に残すのは絶対悪というテーマである。ところが、その収容所をかつて含有した地方の「シロンスク人(シュ

レージェン人)」は、集団の罪を突き抜けて、個人の運命に関心を寄せる懐の広い人々として18世紀の旅行文学で描かれた。そして今日でも同様に想起される。

中世の都市建設以来、ほぼ900年の歴史を記したシロンスク地方には、ハンザ都市として繁栄を誇り、神聖ローマ帝国の帝国議会も開かれた格式あるプロツワフ市、木造建築としてはヨーロッパ最大で、五葉のバラを模って設計されたローゼンベルクの教会、古都ニサなどある。それらに並んで、戦後はポーランド名を名のり(名のらされ)、冷戦終結後はドイツ名に改称したというシロンスクの人々、長い時間、国境を越えて生きたシロンスクの農民が、今日もこの地方の代名詞である。³⁵

注

- 1 終戦直前にドイツ軍の指令により、或いは自らの判断で居住地を去ったドイツ人も数多く存在したからである。周知のように、ドイツ側からは「追放」(Vertreibung)と呼ばれるが、ポーランド側からは「移住」(Umsiedlung)となる。この点を考慮して Vertriebene「追放された人々」も「引揚者」と一括されることがあるが、ここではドイツ語の直訳「追放された人々」を用いる。
- 2 ある牧師の仲介による。Südwestrundfunk, Stuttgart, 30.August 1999, In: "Direkt aus Europa auf deutsch", Nr. 224, S.31ff. 飛鳥洞
- 3 今日の表記ではシロンスクとなるが、シュレージェンという地名は「シュレージェン戦争」、「シュレージェン風天国(料理名)」などの歴史的な命名に保たれている。ここでは第2章で18世紀を扱う際に「シュレージェン」をもっぱら用いることとする。同様にグダンスク市をダンチヒ市、プロツワフ市をブレスラウ市と記す。
- 4 Dieter Zimmerling: "Der Deutsche Ritterorden", Econ, 1999, Dusseldorf. 山内進「北の十字軍」1997年、講談社
- 5 このときオーストリアにもシュレージェン地方の縁に当たるズデーテン(スデーティ、今日のチェコ領)など若干の地域が残された。マリア・テレジアのコメントは「彼は(フリードリヒ二世)は私に垣根を残して、庭を持っていった」。Helmut Neubach: "Kleine Geschichte Schlesien", 1996, Bund der Vertriebenen, Bonn, S. 6
- 6 Charles Higounet: "Les Allemands en Europe centrale et orientale au moyen age", 1986, Wolf Jobst Siedler Verlag, 「ドイツ植民と東欧世界の形成」シャルル・イグネ著、宮島直機訳、1997年、彩流社、432頁
- 7 幾つかの同趣旨の発言をまとめて、"Der Fürst ist der erste Diener seines Staates". Friedrich der Große (1712-86) という文章になった。
- 8 Uli Kutter: "Reisen — Reisehandbücher — Wissenschaft", ars una Verlagsgesellschaft, Neuried, 1996, S.8ff.
- 9 1648年から1789年までに啓蒙主義の趣旨に沿った大学が神聖ローマ帝国内で14校、開かれた。神聖ローマ帝国内で最も古い大学は1348年のプラハ大学に遡る。これらの大学がヨーロッパ中世に大学を支配したスコラ哲学を離れ、実的な学問をめざしたこと、その意味で、これらの大学は創設の時期においても思想においても、新制大学である。
- 10 Uli Kutter: o.a., S.237ff.
- 11 戸叶勝也「ドイツ啓蒙主義の巨人フリードリヒ・ニコライ」朝文社、2001年。Adolph Freiherr Knigge: "Über den Umgang mit Menschen" in: "Ausgewählte Werke Band 6", Fackelträger, Hannover, 1993.
- 12 Uli Kutter: a.a.O., S.261.
- 13 Laurence Sterne: "Memoirs of Mr. Laurence Sterne, The life & opinions of Tristram Shandy, A sentimental journey, selected sermons and letters" edited by Douglas Grant, Rupert Hart-Davis, London, 1950, p.676-682 "The Prodigal Son"
- 14 Uli Kutter: o.a., S.197.
- 15 ebd., S.119ff.

- 16 Gert Robel : “Das ferne Reich des Nordens — Rußlandreisen”, Leif Ludwig Albertsen : “Eher enttäuschend — Deutsche Reisende in Dänemark und Schweden um 1800” beides In : “Reisekultur” hrsg. von Hermann Bausinger, Klaus Beyrer, Gottfried Korff, C.H.Beck, München, 1991.
- 17 Johann Timotheus Hermes : “Sophiens Reise von Memel nach Sachsen”, Deutsche Biliothek des Ostens bei Nicolai, Berlin, 1991その原本は “Sophiens Reise von Memel nach Sachsen [Motto :] Quisquis. Erit. Vitae. Scribam. Color. Hor. Rechtmäßige dritte, vom Verfasser durchgesehene und vermehrte, Ausgabe, in sechs Bänden”, Leipzig bei Johann Friedrich Junius. 1778.
- 18 Hermes : o.a., S.12.
- 19 ebd.,S.5.ff.
- 20 ebd., S.72. オリーヴァもシドリッツもダンチヒ近郊の町。
- 21 ebd., S.69.
- 22 ebd., S.68. 「おぞましいことわざ」とは「シュレージエン人はロバ食い」である。
- 23 ebd., S.71.
- 24 ebd. リッサは7年戦争の戦場になった町である。
- 25 Heinz Nawratil : Die Vertreibung der Deutschen-unbewältigte Vergangenheit Europas, 1996, Bund der Vertriebenen, Bonn, S.15.
- 26 「高シュレージエン」はオポレ市を中心とした東南部、「低シュレージエン」はプロツワフ市（ブレスラウ市）を中心とした北西部。前者にはカトリック教徒が多く、後者にはプロテスタントが多い。しかし、ドイツ系住民が目立つのは「高シュレージエン」である。
- 27 Helmut Neubach : o.a., S.23.
- 28 Holger Breit : “Die Deutschen in Oberschlesien 1163-1999”, 2.Auflage, München, 1999, S.170.
- 29 クライザウには、第二次世界大戦中、ヒットラーの暗殺を企てた将校団の中心人物だったモルトケ伯爵の地所があった。
- 30 Heinz Nawratil : o.a., S.6.
- 31 1992年夏、ベルリンで有名なカバレット（政治寄席）、デイステルの演目の一つに「高シュレージエン」があった。「オーバーシュレージエン（高シュレージエン）！」と舞台上で叫ぶ男を笑い飛ばすべきなのか、客席の反応には息を呑むような感じ、あるいは戸惑いがあったと筆者は記憶している。Das Berliner Kabarett-Theater Distel am Bahnhof Friedrichstraße, “Berlin, Berliner, am Berlinsten”, Premiere : 18.Oktober 1991.
- 32 Ryszard Emmering, Urszula Zajączkowska : Oppeln, Schlesischer Verlag, 2003, S.102
- 33 Spiegel Nr. 34, 18.8.2003.
- 34 Helmut Neubach : o.a., S.20.
- 35 シロンスク地方は地味が豊かで、ドイツ帝国時代はプロイセン地方と並び、穀倉地帯であった。現在も先進農業地域であることが広報誌に解説されている。Ryszard Emmering, Urszula Zajączkowska : o.a., S.103.

Nachfahren der deutschen Siedler
—— Schlesien im 18. Jahrhundert und heute ——

Setsuko ICHIDA-KAKIMOTO

Am 1. Mai 2004 werden 10 europäische Staaten Mitglieder der EU. Kurz vor ihrem Beitritt ist die Diskussion um alte Probleme, die auf den Zweiten Weltkrieg zurückgehen, wieder, aufgelebt. Deutsche und Polen erheben gegeneinander Anspruch auf Entschädigung für Schäden im und nach dem Zweiten Weltkrieg. Die Entschädigungsansprüche von deutscher Seite kommen von Deutschen, die gegen Kriegsende auf deutschen Befehl hin ihre Heimat räumen mußten, von sich aus vor der sowjetischen Armee geflohen sind oder nach Kriegsende “ausgesiedelt” oder “vertrieben” worden sind. Eins dieser Gebiete, die polnisch wurden, ist Schlesien, Schlesien, heute Śląskie, Opolskie und Dolnośląskie. Im Mittelalter, besonders im 12. und 13. Jahrhundert, waren viele deutsche Bauern dorthin auf Wunsch der Könige von Polen umgesiedelt. Auch im 19. Jahrhundert kamen noch deutsche Bauern aus dem Westen nach Schlesien. Im Zusammenleben mit Polen entwickelte sich der Menschtyp des Schlesiers, in dem sich Polnisches und Deutsches verbanden. Heute, 14 Jahre nach dem Ende des Kalten Kriegs, knüpft die Region wieder an ihre von Deutschen und Polen gemeinsam gestaltete Vergangenheit an.